

と(教皇)聖下の御足に接吻して然るべき従順を表すために彼らを遣わすのであり、これは日本人がヨーロッパにおいて知られるためにも、また、彼らが我がキリストの教えの偉大なることや(教皇)聖下ならびに他のヨーロッパ諸侯の栄華と威厳を知り、貴宮廷やローマの宮廷を見て日本へ戻った後、その見聞について証言し、(日本)国民が我らの望みと教えの何たるかを理解する上で有益なものと我らには思われる。それには彼ら(少年たち)が満足して日本に帰るように恩恵を施し厚遇することが甚だ肝要である。

また、別の書簡においては、

その目的は、この者たちの名において教皇聖下の御足に接吻し、至高の司牧者たる聖下に聖服従し、また国王陛下のもとを訪れ、ヨーロッパに日本人のことを熟知してもらうためである。少年たちは、我がヨーロッパの大神たち、様々な事物についての知識を得るためにも派遣されたのである。：

私が「ヨーロッパに」赴こうと切望し、また「そうするよう」に「駆られて二つめの理由は、日本の維持のために、世俗的な救済策を手に入れることであつた。というのも、その救済策がないために、かの地方「日本」のイエズス会とキリスト教界の全体が、著しい危機に陥っているからである。：

四つめの理由は、この日本人の少年たちを「ヨーロッパまで」同道してゆくことであつた。というのも、少年たちが私と一緒に行くならば、彼らは私が切望していることの全てと、また特に日本の世俗的な救済策とを大いに助けてくれるであろう、との結論が下されたからであり、またそれは非常に確実だからでもある。：このほかにも、少年たちが我が教会と教皇聖下、および聖下の枢機卿たちの栄光を目にし、ヨーロッパの様々な都市と支配者たちの偉大さと、その富める様を目にするならば、少年たちは大いに啓発され、日本に戻った暁には、我々の事柄

に光彩を与え、名声を高めてくれるであろう。²³と、書き記している。

これら二通の書簡により、使節派遣の目的は、次の通りであつたことがわかる。

- ①スペイン国王と、ローマ教皇に、恭順の意を表すこと。
- ②日本人をヨーロッパの人々に見せ、彼らに日本人のことを知ってもらうこと。
- ③少年たちにヨーロッパの栄華と威厳を実感させ、日本に戻ってから、そのすばらしさを伝えさせること。
- ④日本での布教活動維持のために、世俗的な救済策を手に入れること。

少年たちが、ローマ教皇グレゴリオ一三世に謁見を果たしたことは、ヨーロッパに大きな衝撃を与えたようである。教皇への謁見が、いかに華々しく、またローマ・リスボンを往復する際も、行く先々の諸侯から盛大な接待を受けたことは、よく知られていることである。遣欧使節はこの崇高な目的のために立案されたのであり、その役割を立派に果たした少年たちはいかにすばらしかったか、と彼らを高く評価し、顕彰する人は後を絶たない。派遣された者たちがまだ一〇代の少年であつたことが、一層そのような気持ちにさせるのであろう。

しかし、ヨーロッパで彼らはどのように思われていたのであろうか。盛大な歓迎を受けた記録は残っているが、それは純粹に少年たちに向けられたものばかりではなかつた。

この町の人々は、日本人たちを一目みたいと希望しているのだ、総長様からメスキータ神父にここまで来るように勧めて下さいませんか。町のほうからこのことを切に要望されていますので、総長様にお願ひします。日本人たちが来たなら、確かに感化されると思うし、私たちの取り計らいによって、その望みがかなえられたのを見て、皆、私たちのこの町に対する愛を理解

するでしょう。

この書簡は、遣欧使節をわが町に招待することが、「私たちのこの町に対する愛を理解させる」ことになる、と述べている。つまり、日本人使節という珍しいものを招待することができる自分たちの政治力を誇示することが重要なのであって、そこには必ずしも、ローマ教皇への謁見を果たした少年たちへの敬意だけがあるのではない。ヨーロッパから遠く離れた「日本」という場所から、教皇に恭順の意を示してきた少年たちへの好奇心、そして、そのような人を自分の町に招待できる力量を誇示するために、少年たちは利用されたという側面もあつたのである。

メスキータがイエズス会総会長あての書簡で

この日本人たちについて、とりわけ彼らに対する処遇と他の人々に礼節を尽くすことや、その際、彼らに不名誉にならないようにとるべき方法についてなど、ここではさまざまな対立と意見がありました。それは、ここ神父たちは皆、自分の任務と友人への顔向けに応えたく行ずることがあるので、使節たちには時には退屈となります。わたしはこのすべての事柄において、管区長アレクサンドロの決定をまもるようにしますが、当地の神父はそれに従うのを良しとせず、私を責め、私たちがこの目上の決定に従わなければならないと言っています。アレクサンドロ神父がはっきり決定した場合でも、前述のように彼らには行いません。私はひとつのことをいふことができます。アレクサンドロ神父の決定が守れなかつたたびによい結果を生みませんでした。

と書いている。このように、必ずしもヴァリニャーノたちが期待した結果をもたらしたわけではなかつたのである。

また、時には、神父から頼まれて出迎えをしたこともあつたようである。イエズス会総会長あての書簡には、

しかし、道中は伴つた人が少なく、それも途中までで、テル

ニに入ったときは私たちだけでした。ここでは身分ある数人の人と太鼓を打つわずかな兵が門まで出迎えて、町の中で挨拶しましたが、それは形式的で、ベネデット（ベント・ロペス）神父の頼みに応じて行われたことです。知事と行政委員たちは上からの命令がなければ何もしないつもりだと、はっきり言いました。（中略）夕食は、大勢が集まれる広間に準備されていましたが、町には貴人たちがたくさんいるにもかかわらず一人も見えませんでした。

と述べられているように、場所によって、遣欧使節への対応にはかなりの差があつたのである。

さらに、彼らを歓待した人々の中にも、彼らがどこから来たのか正確に知っていた人は、少なかつた。

トスカナ大公あての書簡には「日本の島なるインドの公子四人渡来し」と、書かれていたり、モテナ文書館に残る帳簿には、「城内に滞在せる日本人と称するインドの紳士四名」、「インドの王たちの食卓用として」といった記録が見られる。使節は、ヨーロッパの人々に、ヨーロッパとキリスト教の栄光を再確認させる働きをしたが、日本と日本人をヨーロッパの人たちに分からせることは、困難だったのかもしれない。

次に、ヴァリニャーノが使節を派遣した三番目の理由、少年たちにヨーロッパとキリスト教のすばらしさを伝える役目を担わせようとしたことについて考える。

一五九〇年「天正遣欧使節記」（以下「使節記」と略す）という一冊の書物が出版された。使節の一人である千々石ミゲルが大村善前の弟リノ、有馬晴信の弟レオを相手に航海やヨーロッパでの見聞を三四回にわたって語る構成になっている。ヴァリニャーノがマカオで長期滞在を余儀なくされたのを機に編纂し、サンデにラテン語訳させたものとみられている。

なぜラテン語に訳されたのかといえ、当時ヨーロッパにおいて

公的な場や学術的な書物には、ラテン語が使われていたからである。ラテン語で出版することを通じて、アジアで積極的に布教活動を行っていたイエズス会の存在をヨーロッパに誇示するためであったと同時に、日本の信者たちに、ヨーロッパ事情を知らせ、『使節記』を読んだ信者を通じて、多くの日本人にヨーロッパとローマ教皇の偉大さを教えるためであった。それゆえ、この書物は、宗教・軍事・歴史・科学・風俗あらゆる点において、いくぶんかの誇張を伴って、ヨーロッパの優位さを説いている。

この著書について、ヴァリニャーノは後に、次のように語っている。

この本を書かせたのは、その士たちと一緒に再度日本へ赴任した私自身であったし、持ち帰った印刷機を使って発行させたのは、日本人にそのことを伝えるためであった。すなわちローマ教皇庁やキリスト信者である君主たちの懸念さに倣い、ヨーロッパの領主たちの偉大さを知り、また政界や宗教界の慣習や儀式がどれほど異邦人と日本の僧侶たちのそれと異なるものであるか、その相違を明らかに示すためであった。

このように、使節とともに持ち帰った印刷機も、帰国後ヨーロッパとキリスト教のすばらしさを日本に広めるための道具であった。少年たちの対話形式で書き進められているが、マカオでラテン語に翻訳されて出版されたときには、まだ少年たちは日本に戻っていなかった。『使節記』「対話」の冒頭に「私のもつとも愛する兄弟ミゲルよ、あなたやマンシヨやマルチノ、それにジュリアンがあらゆる人々の歓呼のどよめきのうちに、この有馬の城に入ってかられるのを眺めたときの、われわれの心のうれしさはいかばかりであったろう」と書かれているが、明らかに創作である。このことから、『使節記』は、ほぼすべてヴァリニャーノの手によるものだと考えられる。

ヴァリニャーノは、使節帰国後、四人の少年たちを中心に、ヨー

ロッパへの憧れ、ローマ教皇への畏敬の念を日本人に持たせ、日本人聖職者を養成することまで考えていたに違いない。『使節記』は、そのときの教材の一つにもなるものであった。ヴァリニャーノの、使節帰国後の日本人宣教師育成計画の一端をうかがい知ることができる。

高瀬弘一郎氏によれば、一五七八年イエズス会総会長はヴァリニャーノに宛てて、日本人を入会させ、これを積極的に宣教師に養成するよう指令しており、ヴァリニャーノは、日本布教長カブラルの反対を排して、教育機関の設置に着手した。実際、安土や有馬にセミナリオが設立され、伊東マンシヨたち四人の少年は、有馬のセミナリオから選出された。しかし、使節帰国後の一五九二年、ヴァリニャーノは、報告書の中で、日本人の評価をまるで修正し、この問題について後退してしまっているのである。

少年使節の成果を見たのちに、ヴァリニャーノの日本人に対する評価が下ったのは不明である。しかし、彼らの帰国途中に出された伴天連追放令などの影響もあり、日本人宣教師の育成は思ったようには進まず、一六一二年イエズス会総長から、日本人をあまり重用せず、ラテン語などの学問もそれに必要な程度の知識を与えるだけにせよ、と指令されるに至った。帰国後、少年たちとともに、豊臣秀吉との会見を果たしたのが、日本におけるキリスト教の礎を築くという本来の目的を達成できたと言いがたいのである。

使節と貿易

次に、ヴァリニャーノの立案した遣欧使節の四番目の目的である、「世俗的な救済策を手に入れるため」について考える。世俗的な救済とは、つまり資金援助のことである。

日本イエズス会が活動を続けていくために必要な資金は、どこから供給されていたのであろうか。わずかな喜捨もあったが、その資金のほとんどは、スペイン国王・ローマ教皇による資金援助と、イ